

後姿

朱自清 著

私は父と2年余り会ってない。私が最も忘れ難いのは、父の後姿である。

その年の冬、祖母が亡くなり、父も職を離れたりと、本当に災難続きの日々でした。私は父と共に葬儀の為帰郷するつもりで、北京から徐州へ向かいました。徐州に着き、父に会い、家中散らかった様子を見て、また祖母に想いを馳せると、涙を禁じ得ませんでした。父は「こんなふうになったからには、悲しんでも仕様がな。まあ、神様は必ず見ているはずだから。」と言いました。

家に着くと、父は家財を売ったり質入れしたりして借金を返し、また別に借金をして葬儀を行いました。その間家の中は惨澹たるものでした。一つは葬儀の為、もう一つは父が職なく家で過ごしている為。葬儀が終わり、父は南京へ職探しに行き、私も北京の学校へ戻る為、2人で道中を共にすることにしました。

南京では友人を誘って遊んだため一日留まり、翌日の午前長江を渡って浦口に行き、午後そこから列車に乗って北へ向かいました。父は忙しいので、もともと見送りするつもりはなく、旅館のよく知った番頭に私に同行するよう頼んで、再三細かいことまで言い含めていました。私はその年すでに20歳で、北京へは2～3度往復したことがあったので、何も困ることはなかったのですが、父は考えあぐねた挙句、結局自分で見送ると言いました。私は何度もその必要はないと押しとどめましたが、父は「いいんだ。彼らじゃやっぱり心配だから」とのみ言うのでした。

私たちは長江を渡り駅に着きました。私が切符を買っている間、父が私の荷物の番をしてくれました。荷物はあまりにも多く、荷運びにチップを払わないと運べないほどで、父はしきりに荷運びたちと値段の交渉をしていました。わたしは当時本当に「賢過ぎ」で、父の物の言い方はあまり美しくないといつも思っており、どうしても自分で口を挿まずにはいられませんでした。父は最後に値段に折り合いを付け、私を列車まで送ってくれました。父は私のためにドア近くの席を選んでくれ、私は父が作ってくれた紫の上着を席に敷きました。父は道中くれぐれも気をつけるよう、夜は起きているよう、体を冷やさないよう言い、また番頭にもしっかり私の面倒を見るよう言いました。私は心の中で、父の古臭さを笑いました。番頭などただ金の為だけであって、彼らに頼みごとをするなど無駄だとそれに私はもう子供ではない、自分の事は自分で出来るじゃないか。ああ、今思えば、あの時私はなんて賢かったのだろう！

私は父に「父さん、そろそろ行って下さい」と言いましたが、父は外をちょっと見てから言いました。「蜜柑を買って来るから、おまえはここにいなさい。動いちゃだめだぞ」。あちらのプラットホームの柵の外に、物売りが数人、客を待っているのが見えました。あちらのホームへ行くには、線路を横切するため、一度跳び下りて又よじ登らなければなりません。父は太っていたので、あそこまで行くのは当然骨が折れます。私は自分で行こうとしましたが、父がだめだと言うので仕方ありません。私は父の黒い帽子、黒い長衣、青い綿入れが、よたよたとホームの端まで行き、ゆっくりと身を乗りだすのを見ていました。ここまではそんなに難しくはないのですが、線路を横切りあっちのホームによじ登るのは容易ではありません。父は両手をホームの上について両足を持ち上げ、太った体が左に傾き、とても頑張っている様子です。父のこの後姿を見て涙が溢れました。私は慌てて涙をぬぐいました。父や他の人に見られなくなかったのです。私がまた外に目をやると、父はすでに朱色の蜜柑を抱いてこちらに向かっています。父がこちら側に戻ってくると、私も急いで迎えに出ました。父は私と一緒に列車の中に戻ると、蜜柑をどさっと革の上着の上へ置き、パタパタと服の泥をはたいて、とても安心した様子でした。しばらくして「じゃあ私は行くよ。あっちに着いたら手紙を寄越しなさい」。私は立ち去る父を見送っていました。父は何歩か歩くと振り返り、「入っていないさい。中には誰もいないから」。父の後姿が往き来する人ごみに紛れて見えなくなってから、私は中に入って座りました。涙がまた溢れました。

ここ数年来、父と私は忙しく走り回り、家も日に日に以前とは様相が変わってしまいました。父は少年の頃家を出て、仕事を探し、独立して多くの事を成し遂げました。年老いてからこんなに悲惨だとは誰が想像したでしょう！父は見るもの全てを悲しみ、その感情は自分ではどうしようもないのです。感情が内に溜まれば、当然外に出ようとします。家の中のつまらない事で、父はよく腹を立てます。私に対しても、次第に昔のようではなくなりました。しかしこの2年の空白で、父は遂に私の罪を忘れ、ただ私と私の息子を気に掛けるだけとなりました。私が北京に来てから、父は一通の手紙をくれました。手紙には「私は元気だ。ただ首の痛みがひどく、箸やペンの上げ下げに不自由している。お迎えが来る日も遠くないのかも知れない」。ここまで読むと、きらきらした涙の中に、又もあの太って、青い綿入れに黒い長衣の後姿を見ました。ああ、一体いつまた父と再会できるのだろう！

原題『背影』 翻訳：吉田直樹

2005年9月10日再校

2005年9月13日再々校